

雨上がりに咲く花

シャイニー・ギフト

湊  
知花



1

日課の朝練を終えて、智花と二人、縁側に身を落ち着ける。  
「今朝は疲れただろ？」  
よかつたらマッサージしてあげるからそこに横になつてよ。」  
特にヨコシマな気持ちを抱くわけではなく、そう切り出していた  
「え…いいいでしょっか…？」

2

「それじゃお言葉に甘えて…」  
割と素直に縁側に寝そべる智花の姿に、少しドギマギしてしまった。

1  
あまり強くしすぎないようにして、  
ふんわりはぎ等をマシンサージングする。  
「ああ…ほいほい張ってるな…  
ムリさせちゃってたかな…」  
「いいえ…平気です。」

2  
「昴さんとの練習は  
楽しいですし…」

心なしか智花の吐息に  
艶かしさを感じるのには  
気のせいだと思いたい…が。

1  
魔が差した、と言うべきか、  
ちよつと無茶なお願いをしてみた。  
「…うっ、ごめん、あ…足を  
開いてもらっていいかな？」  
「んん…は、はい」

2  
「ちよつと…恥ずかしごどもな女…」  
驚くほど素直に、  
その言葉に従う智花。



1  
黙々とマッサージを続ける…  
今はハッキリと、喘ぐような吐息を  
漏らし続ける智花。

「あつ…んん…」

2  
「はあっ…あ…んっ」

汗の匂いと智花の匂いが  
交じりあい、理性の籬が  
外れる感覚を覚えた

1  
こうなると止まらない。  
従順な態度を見せる智花に、  
さらに「お願い」を試してみる。  
「ね…智花…体操服、  
たくしあげてみて…?」

2  
「……はい、  
すげー…やんこ」

おずおずと  
智花が服を捲ると、  
なだらかな起伏と、  
桃色の頂きが  
目に飛び込んできた。



1

「あ……まだ  
ブラしてないんだっけ……」  
「ふあう……そ……その、  
未発達なので……」









1 「なに言ってるんの。  
大きさとか関係ない、  
智花の身体は  
ちゃんと魅力的だよ」  
「ひゃう……っ」  
そう言って。ピンクの乳首を  
軽く舌で愛撫してみた。  
小柄な身体が軽く跳ねる。

2 「あ……ありがとっ  
っしょごます……っ」  
身体を好きに  
弄ばれてるにも関わらず、  
お礼を言っちゃうあたり  
智花らしい。

1  
おもむろに  
ふくらみの頂きを  
まるごと口に含む。  
強くならないように  
乳首を吸い上げた。

「らまへ……あはあ……ん♡」

2  
眉をしかめる智花  
だったが、苦悶ではなく、  
経験したことのない  
感覚に戸惑っている感じた。

「は……っ……んっ、昂さん……  
赤ちゃんみたいですわね♡」

1  
荒い吐息を繰り返しながらも、  
そう茶化してくれる智花が  
とても愛おしい。



1  
少しずつ愛撫は下の方へ—  
さすがに焦りを見せる智花。

「ふえ…そ…そこは…」



1  
自分でも殆ど  
触れたことがないであろう  
敏感な部分に  
静かに指を添える。

「昴さん…  
や…やさしくして  
ください…♡」

2  
「わかってる…  
安心して智花」

そう声をかけると、  
強張っていた身体から  
緊張が解けるのが  
見てとれた。



1 「優しく」と意識しつつも  
愛撫する指に少しずつ  
大胆さが加わっていく。

「あ……っ……はぁん……っ♡」

2 きもち強めに、大事な  
入り口のあたりを  
つついてみる。

「ひゃん……っ……っ♡」





1  
「すごいね智花…  
スパッツこんな  
濡れちゃってる」

「ふあ…だめ…っ！  
そんな風に言っちゃ  
やです…っ♡」

2  
そんな言い方は  
逆効果も甚だしい。  
抑えられずにスパッツ越しの  
大事な秘肉を押し広げた。

「あ…っや…  
ひろげないでえ…っ♡」



2  
「……おっぱい……」

1  
「ふわ……あ……あ……」  
♡

1  
そのまま  
昇りつめるよつこに—  
智花が絶頂に喘いだ。



1  
「すはるちゃん…いじわるです…」  
「ごめんごめん…」  
ちよつと調子に乗ったかな…」  
気恥ずかしげに  
オレを嗜める智花。

2  
「…えと…その…  
場所を…替えませんか？」  
いきり立ったままの  
オレの股間を、  
恥じらいながらチラチラと  
盗み見る智花。

朝練(?)は更なる延長戦へ――

1

ところが替わってオレの部屋。  
どちらからともなく服を脱ぎ始め、  
二人とも一糸まとわぬ姿になっていた。

2

「ふあう…お…おちんちんって  
こんなにおっきくなるんですね…」  
屹立したペニスを、跪いた智花が  
おっかなびっくりと眺める。

3

「お風呂の時に  
お父さんのを見たけど、  
もっと小さかったですよ？」  
それは当然だろう。  
娘を前にして勃起してたら大問題だ。  
忍さんはそんな人ではない。

1

「わ…ぬるぬる…」

先走りですっかり  
べとべとになってるペニスを  
興味深そうに撫で摩る。  
…てかもうすでに  
それだけで気持ちいい。

2

「んっ…ふっふっすわは  
いいですが…」  
「…んっとな、いきなりなんだけど、  
口でできるっ…」

手コキでも十分気持ちいいのだが、  
期待を込めてお願いしてみる。

1

「はい……う、昴さんのお望みななら」  
間、髪入れずにそう応えてくれた  
智花が女神に見える。

2

「ふ……ふらあんです  
お口に唾を吐いてみますね？」  
「うう、うん、お願いします」

3

「あ……んん♡」

大きく開けた智花の  
口腔内が妙にエロく見えて、  
次第に思考が奪われる感覚――



1

「ん…ちゅ…ん…ん…」

ペニスの先端付近を、  
唇でぎゅちなく  
愛撫してくれる智花。



1  
「ふあ…はへえ…っ  
…んむ…♡」

2  
口まわりを先走り  
でぐとぐとにしながら、  
一生懸命な愛撫を重ねる。  
「ああっん…  
気持ちいいよ智花…っ」

1

「はっ……んっ……  
えう……れるろ……っ♡」

褒められたことに  
気を良くしたのか、  
今度は舌を使った刺激を  
交えてきた。





1

「んむ……ろお……れふか？  
すいある……ふあん……っ♡」

上目遣いでオレの表情を伺う  
智花だったが、実はちよつと  
刺激が物足りなくなってきた。



1

「……ごめん智花……」

苦しかったら

イヤイヤってしてね？」

そう断って、少し強引に、  
ペニスを智花の口内に押し進める。

「んまっ…んまっ…んまっ…」

さすがに眉がしかめられるが、嫌がる気配は無い。ガマンしている可能性は高いがここは甘えさせてもらおう…。

「んまっ…んまっ…んまっ…んまっ…」

なるべく苦しくないようにこまめにゆつくり、心なし浅めに抽送を繰り返す。





「はぁ……うん……」

「……おはな……おはな……」

1

1

智花の喉奥へと  
白濁した欲望を解き放つ。

「ん……っ！  
うぶ……っ……っ！」

2

苦しげな呻き声に  
罪悪感を覚えながら、  
しかし射精は止まらなかった。



1

自分でも驚くほど、  
長く射精していた気がする。

「ん……くっ……んっ……ん……っ♡」







1

我に返ると、  
眉をしかめながら一生懸命、  
喉に溜まった精液を嚥下する  
智花の姿があった。

1

「ご……ごめん智花っ！  
苦しかっただろ!？」

「んぐ……し……んあ……はら……ん」

2

涙目で咳き込む  
智花の口もとから、  
飲みきれなかった精液が  
垂れ落ちる。

1

「これ…精子って  
言うんですよね…?  
赤ちゃんの元になる…って」

「あ…あぁうん」

2

「かわった味…ですね…。  
す…昴さんのだから  
不味くはない…ですけど♡」

そう言うてはにかむ智花の頭を  
オレは愛しげに、かつ目一杯  
くしゃくしゃに撫でまくって—

3

お姫様だつて、智花を  
ベッドへといざなつた。



1  
智花をベッドに横たえ、  
足を広げてもらおう。  
少し恥じらいを残しつつも  
素直に従ってくれた。

「えっ……と、  
じゃあ今更だけど……  
いいかな智花？」

2  
キョトンとする智花。  
…これから「」をするのか  
理解している…と信じたい。

「大丈夫です。  
昴さんが望むままに…。  
…それが私の望みでも  
あります♥」

試合の最中によく見るような  
強い決意を宿した瞳が、  
やたらに大人びて見えて  
愛おしかった。

1 「じゃ智花…  
カ…抜いてね…？」  
いきり立った。ペニスを  
智花の小さな入り口に添える。

2 「…は…う…」  
さすがに智花の表情が  
少し強張った。  
見ない振りをして  
そのまま押し進め



1  
「はいっ……たよ智花っ……  
大丈夫……？」

思いのほかキツい  
締め付けから来る快感に  
耐えながら智花を見る。

2  
「ふぁ……はい……っ♡  
平気……ですっ……。」

破瓜の痛みに震えながら、  
弱々しくも微笑む智花。

「わたし……うれしい……  
です……っ♡  
ごうして……昴さんと  
ひとつになれて……♡」

1  
ともすれば、智花の健気さに  
暴走しかけた欲望を抑え、  
ゆっくりと身体を動かす。

「んっ……はっ……」

2  
「んっ……うあ……っ  
……あはん……っ♡」

まだ痛みが強いのか、  
時折うめきに似た声が  
聞こえたが、少しずつ  
少しずつ、艶かしい響きに  
変わっていった。



1 「あ……ん……んあ……  
ひんっ……はひっ……♡」

智花の口から  
艶のある喘ぎ声しか  
聞き取れなくなった頃、  
さすがにうちの抑えも  
利かなくなってくる。

「やあ……昂さん……♡  
……こえ……恥ずかしい声……  
出ちやうっ……♡」

2 その恥ずかしい声を  
無理やり引き出したくて  
抽送のスピードは次第に  
速くなるのだった。

「智花……っ……！  
可愛いよすこく……  
もつとエロい声……  
聞かせてよ……っ！」

そして——急速に  
射精感が込み上げる。

1  
「智花っ……ともか……っ…  
いいかなっ!?  
「うまっヨっっ……っ…」  
「ふあ……っ♡  
くださっ……っ…  
膣内なかに……っ♡」

2  
同意の言葉を聞くか  
聞かないかのうちに、  
欲望を余さず  
智花の膣内に吐き出した。  
「ふわっ……♡  
あ……あはあんっっ!!」  
快感の奔流に飲まれる  
頭の片隅で、絶頂に喘ぐ  
智花の声を聞いた  
気がした——

1 「は……はあ……  
……は……ん……♡」  
長いような短いような  
余韻に浸りながら、  
未だ夢見心地な智花と  
見詰め合う。

2 「え……と……  
よかった……のかな、  
ホントに膣内<sup>なか</sup>に出して……？」

自分で同意を取って、  
なおかつ目一杯膣内<sup>なか</sup>出し  
しておきながら  
今さらな話した。

しかもまた繋がったまま★

1  
まだ少し焦点の  
定まらない瞳を揺らし、  
気を悪くする風でもなく  
智花は言う。

2  
「お腹の奥、あったかい……♡  
昴さん……わたし今……  
とても——幸せですよ♡」

——まきゅんく  
「シャイニーギフト  
「雨上がりに咲く花」の  
二つ名に相応しい微笑みを、  
その満面に湛えるのだった。